

お雛様のルーツ

THE ORIGIN OF HINA DOLLS

3月3日は桃の節供。桃の節供後は、雛人形はすぐ片付けるものとされてきた。なぜだろう？

節供人形は節供が終われば片付けるべきものだから、というのがメインの理由だが、長く飾っておくと湿気や日光で人形が傷むから、という現実的な理由もある。さらには雛人形は本来、持主の禍いを肩代りする「ひとがた」であり、厄災を移し負わせたまま放っておくと、禍いが本人に戻ってしまうから、という説もある。

この「ひとがた」とは何か？ 雛人形のルーツを探ってみよう。



図1 御殿飾りの内裏雛と三人官女（中野区立歴史民俗資料館所蔵）
京都を中心とした西日本では、雛段の最上段に紫宸殿（内裏の正殿）を模した御殿を置く、御殿飾りが普及した。制作：1952年

1 ひとがた

ひとがた（人形＝図2A）は、形代という呪物のうち、人間に対する呪術に用いられるもので、人をかたどっている（人形代）。

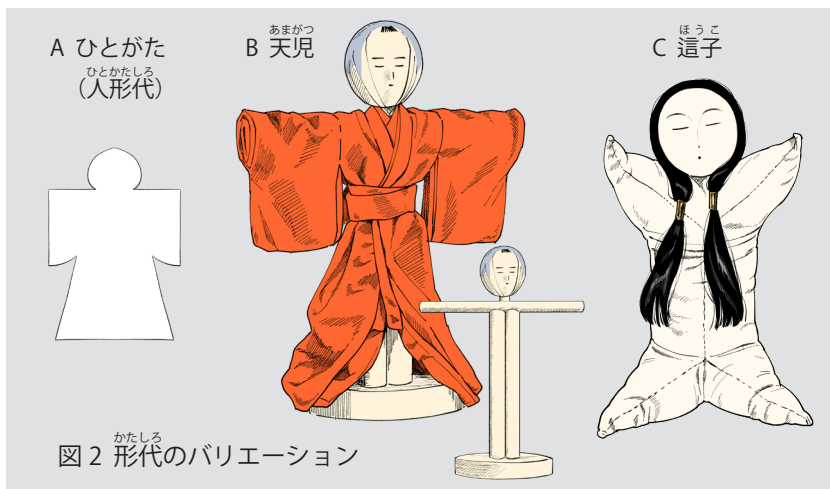
古代の日本では、病気や不幸の原因は穢れが乗り移った為だとされていた。穢れを清める呪法の一つとして、襖や祓が行われた。祓った穢れは次のように、ひとがたに移して祓い捨てた。①ひとがたに自分の名前や数え年などを書き、身体を撫でる。身体に悪い部分があれば、そこを念入りに撫でる。②それに息を吹きかけて魂を移す。これで、ひとがたが自分の身代り（形代）になり、心身の病いや禍い、罪の穢れが転移される。③②のひとがたを川や海に流す、燃やす、地中に埋めるなどして祓い捨てる。

以上はひとがたを善用する白呪術的用法だが、黒呪術的用法もある。人の分身であるひとがたを傷つけ、間接的に本人へダメージを与えるのだ。よく知られているのが丑の刻参りの藁人形だろう。古くは奈良の平城京址から、目や胸に木釘を打ち込まれた板のひとがたが出土している。ひとがたは古くは紙・木・藁・金属・

2 天児と這子

近代までは医療水準が低く、乳幼児や産婦の死亡率が非常に高かった。そのため子ども用の形代もあった。天児（図2B）と、這子（図2C）である。双方とも平安時代に、貴族の間で用いられ始めた。子どもの枕元に置き、その子に降りかかる病や厄災を移し負わせた。

天児 三十センチほどの竹を、丁字形に組み合わせて作った。竹を二本束ねて胴体にし、一本の竹を横にして両腕にする。天辺に白絹製の頭を乗せて顔と髪を描き、産着などを着せた。子どもに新しい着物を着せる時は、まず天児に着せていた。**這子** 「祓い子」から来た名称で、這い這いする赤ん坊をかたどっている。白絹に綿を入れて縫い合わせる。頭部を差し込んで顔を描き、絹糸の黒髪を付けて金紙で束ねた。白絹の本体のままのものが多く、着物を着せる場合もある。感触が柔らかいので、おもちゃにもなった。江戸時



代には庶民にも普及し、女性のお守りともなった。婚礼調度に加えられ、雛祭りにも飾られていた。

3 ひいな

古代にも呪物・お守りとしてのひとがたと別に、リカちゃん人形のようなおもちゃの人形もあった。「ひいな（雛）」である。貴族の少女がひいな遊びをする様子は、王朝文学にも描かれている。たとえば源氏物

語の『紅葉賀』では、十一歳の若紫が元旦からひいな遊びに熱中し、十を過ぎたらひいな遊びはせぬものですよ、と乳母にたしなめられている。

ひいな の形や作り方についてはっきりした記録はないが、女と男一対の立ち姿の紙人形を、手作りしていたようだ。これに紙や布の衣裳を着せていた。紙が貴重品だった当時としては、贅沢なおもちゃだった。

4 雛祭りと雛人形

ひいな遊びから雛祭りへ 雛祭りはこうした貴族のままごとひいな遊びと、神事の「上巳の祓い」が、長い歳月の間に融合したものとされている。上巳の祓いは、三月の上巳の日に水辺で陰陽師にお祓いをさせ、ひとがたを川や海に流す信仰行事で、流し雛の風習の基になった。三月上旬は三月最初の巳の日（こと）で、「巳」は干支暦上の日にちである。干支暦では毎年日にちが変わるため、後に三月三日に定着した。

江戸時代に入ると三月三日は五節供の一つとして祝日になり、上巳の節供は武家の公式儀礼になった。次いで庶民にも広まり、女の子の誕生を祝い、健やかな成長と結婚・安産・家庭円満・長寿を願うお祭りになり、

「雛祭り」という言葉も生まれた。

ちなみに上巳以外の五節供は一月七日の人日、五月五日の端午、七月七日の七夕、九月九日の重陽である。節供はもともと季節の節目の節日に、その時季の供御（飲食物）を神に捧げ、それを下げて人々が共に食べる行事だった。今は「節句」という表記が多いが、元来は「節供」と書いた。なお節供や、ひとがた・天児・這子・上巳の祓い・干支暦は、いずれも中国伝来のものである。

立雛から坐雛へ 原初の雛人形は、紙で作られた紙雛だった。女男一対の立ち姿の立雛だ。そのフォームは現在でも紙の流し雛に受け継がれている。男雛の両袖を大きく広げた姿は、ひとがたや天児に似ている。十五世紀後半には、水に流す雛と室内に飾っておく雛が区別されるようになった。観賞用の雛人形はより精巧に、華美になっていく。紙の衣裳は布製になり、顔は立体的になった。胴体も立体化し、安定性のある坐った姿の坐雛が現れ、江戸時代には十二単や衣冠束帯姿の坐雛―衣裳着雛が主流になる。

雛人形を祭る場所も変わっていく。古くは床に敷いた緋毛氈や台の上に祭られていた。江戸時代になると五

土など様々な素材で作られていたが、現在は和紙製が多い。昨今はウェブ上でも神社のお祓いを受けられるが、それにはスマートフォンに表示したひとがたが用いられている。

近代までは医療水準が低く、乳幼児や産婦の死亡率が非常に高かった。そのため子ども用の形代もあった。天児（図2B）と、這子（図2C）である。双方とも平安時代に、貴族の間で用いられ始めた。子どもの枕元に置き、その子に降りかかる病や厄災を移し負わせた。

天児 三十センチほどの竹を、丁字形に組み合わせて作った。竹を二本束ねて胴体にし、一本の竹を横にして両腕にする。天辺に白絹製の頭を乗せて顔と髪を描き、産着などを着せた。子どもに新しい着物を着せる時は、まず天児に着せていた。**這子** 「祓い子」から来た名称で、這い這いする赤ん坊をかたどっている。白絹に綿を入れて縫い合わせる。頭部を差し込んで顔を描き、絹糸の黒髪を付けて金紙で束ねた。白絹の本体のままのものが多く、着物を着せる場合もある。感触が柔らかいので、おもちゃにもなった。江戸時

人囃子などの供回りの人形や雛道具の種類が増え、雛壇が設けられるようになる。その段数も次第に増え、江戸末期には七、八段にもなった。

こうして観賞用の高価な雛人形を飾り祭るほうがメインになると、元来の流し雛の風習はすたれていった。このように雛人形はひとがたと愛玩・観賞の要素を兼ね備えた、呪術性を帯びた人形と言える。お守りとして、女の子は自分専用の雛人形（一対の内裏雛）を持つものとされてきた。婚礼調度にも加えられ、結婚後の初節句も祝っていた。

ちなみに衣裳着雛の胴体は、藁の束か桐で出来ている（現代は合成樹脂製のものもあるが）。身体の芯が藁束の人形！やはり、お雛様はタダモノではなかった。

「企画展」おひなさま展

場所…山崎記念 中野区立歴史民俗資料館
期間…2023年2月14日～3月12日
9時～17時／月曜・第3日曜休／入館無料
見所…江戸時代から昭和にかけての約40組の雛人形を展示。旧江古田村の名主・山崎家の雛人形と雛道具は、中野区指定有形文化財。そのうち鯉を運ぶ「鯉桶」は江古田ならではの雛道具。海が遠い江古田では淡水魚の鯉を生簀に飼い、祝い事に贈ったり食べたりしていた。

※ 参考資料は最終頁に掲載

※ 本誌の掲載内容・お知らせ情報は記事作成当時のものです。